
店長が変わりましたっ！

ありす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

店長が変わりましたっ！

【Nコード】

N8001V

【作者名】

ありす

【あらすじ】

ファミレスで働く族あがり30女の店に新店長が配属された南米奥地から来た足長族出身の店長が店をどんどん変えてゆくのだ。新店長の改革は・・・どうなることやら・・・頭が非常に良く海外店舗（奥地のみ・・・）では成功してきた彼だったのだが・・・。

その1 「店の重鎮 麗さまだよ!」

私の名前は河原崎^{カワハラザキ} 麗^{レイ}。

・・・だったらいいな・・・で、はや15年。
本名は河原^{カワハラ} 鉄子^{テツコ}三十才。

私は過去を捨てた。15才の時に名前も捨てた。

なぜなら私は私の名前が大っ嫌いだからだ。

なぜに・・・ 鉄子なんだ。なぜに。

父親が鉄道オタクだったからだ。

たったそれだけの理由で私は私の辛い人生を歩んで来たんだ! 周り
は真美とか里奈とか美咲、

若菜、みんなかわいい名前だった、鉄道オタクならせめて

ひかり、とか? のぞみ? とかあっただろうがよ～～～～ コラコ
ラア～～

・・・私は家を出た。

そして違う町でこの河原崎 麗として生きてきた。

高校には行かず、その町のレディース < 港町レディース > 服屋
さん・・・ではなく

そう、暴走族の総長として名を馳せたのだ

人は私を【麗さま】と呼ぶ。

「鉄子ちゃん　ねえ鉄子ちゃん！」

「・・・ゆかり、お願いだから昔の名前で呼ぶのは止めてくれない？」

＜神田ゆかり＞ゆかりは唯一私の過去を知る女だ。

幼なじみだった彼女は私に何故か憧れて住み慣れた町を離れ　族にも入り　今もこうして同じ職場にいる。

そして、共に独身なのだ。

このゆかりは一本抜けていて、正直どうしようもない馬鹿なのだが
なぜかいつも隣にいるのだ。

「ねえテツ、あつ麗さん　もうすぐ店長変わるらしいっすね？」

私達はチェーン店のファミレスで働いている。

私はリーダーを任されていた

「ゆかり、珍しく業務連絡に目を通したんだね。やる気が出てきたの？」

「何言ってるんすか！イケメンだったらどうします？ヨダレもんっすよ！」

どうもしないよ。全く、興味ないわよ。

ただ店長が変わるとやりにくいよね いろいろと。
店の雰囲気すら変わるじゃん。

噂に寄るとき、海外から来るらしいよ。最近海外に店を出し過ぎなんだよね。

昔から言うじゃん？風呂敷を広げ過ぎると畳めなくなるって。
何店舗目なんだよ。

「風呂敷ですか。どうやって畳むんですか・・・それ？四角い布ですよね？」

「・・・何も聞かなかった事にしてくれ」

ゆかりとは・・・話が・・・合わない。

「新店長、今日の10時には来るって行ってたよ。
さっさと掃除を済ませなくっちゃ。

ユカ、いや 神田さんよろしくね。

それにしてもさっきから外が騒がしくない？パトカーの音がすごいよ？」

「麗さん パトカーの音は血が騒ぐっしょ？」

「うん！うん！なんかワクワクしてきた！逃げなきゃ！みたいな！
四方八方に散るのがコツでさ！

・・・

馬鹿言ってるんじゃないよ！
もう過去の話だよ。」

掃除をしに行ったゆかりが5分程して血相変えて戻ってきた。

「テ、テ、テ、テ、いや麗さん！変質者がいますっ！駐車場に上半身裸でなんか長い棒を持ったパンチパーマの人が！！」

「まじ？

さっきのパトの音はもしや！

・・・葉中（薬物中毒）だねきつと」。私は冷静にゆかりに告げた

ゆかりは言った

「麗さん。落ちつきましょう。」

「いや私は落ちついてるよ、」

「私らは第5中出身です！当時の麗さんの名を出せば奴も逃げて行くのでは？裏番の私の名前でもいいっすよ！」

「・・・あんたいつから裏はってたんだよ。

ち、違う、、ゆかり。誰が中学の話をしてんだよ。」

「とにかく 私は行くよ。社員が来るまで私は店を任されているんだ。

ゆかり なんか長い棒持って来てよ。」

「分かりました！」

ゆかりは走った。

私は窓からその変質者の動向を見ながら武器の変わりになるものをゆかりが持って来るまで待った。

「麗さん！ありました！長い物！」

「ありがとう！」

、、、これ蛍光灯じゃねえか・・・」

「はい！長い物です！！」自信満々のゆかりの顔を

殴りたい。

「こんなのさ 相手の棒で

パツリーン、、だぜ？粉々だぜ？・・・戦う前に私の手は血まみれも
んだぜ？痛いよ？

・・・もしくはスターウォーズか？。」

「ああ~~~~お面も要りました？」

「・・・そこじゃねえ・・・」

「、、モップ持って来なよ。」

「モップですか？あれは、あれはヤバいんじゃないでしょうか、
」

「なんでヤバいんだよ！蛍光灯より数倍マシだよ！！
、、まあな、アルミ製だしマジに殴りゃ、血も出るし、、いや正当
防衛になるか、」

「あれはですね、モップ部分が、この雨続きの毎日で乾かなくてかなり臭いです!! 鼻・曲がります。確実に。はい。」

「・・・・・・・・」

「似てるんですよ。」

親父の足の臭いに。 「父親はモップじゃなくて寿司酢だろうが。」

「武器にするから丁度良いんじゃないか。」

相手の顔面に押し付けるって事で。 「

私は既に疲れていた。」

この目の前の女を

絞めたい。グイッと。

私は武器になるモップを手で階段を下りる

「行ってらっしゃーい!!!! ファイト~~~~~おう!!!」

ゆかりが・・・手を・・・

振っている・・・・・・・・。

私の頭にはなぜかスターウォーズのテーマ曲が

流れた。

『変な具合だ。』

そして、さりげなく私はモップに鼻を近づけてみる。

「・・・親父いいいいい～～～～」

その2「愉快な人」

私はジワジワと変質者に歩み寄る

「てめえ！！ どこのもんだ！ 私はこの町を占めてる麗様だ！
この敷地からさっさと出な！
・あ、いや

私はこの店の者です。上半身裸で正気ですか？ まもなくオープンの
時間なのでここから出て貰えますか？」

相手は大きな目玉を一段と大きく見開き私を凝視しこう言う

「名をなんとモウス！」

「はっ？」 片言の不器用な日本語で話し掛ける目の前の変質者。

「私は今の時間、この店を任されてる麗つてもんだ！！
いや・河原崎と申します。」（落ちつけ！ 私！）

「わたくしは

ポカホンタスマルガリロドリゲスヒデキ ですネン」

「長くね？」 （ しかもイントネーションが・おかしい。）

「そうみたいですネ この国では長いようですね

本社の マさんに言われましたですねんデス」

「本社？え？まさか新店長ですか？」

「ですからして、私もここでは名前を変えますねん ですわ」

（なんだこの関西弁なまりの標準語は、しかも？本社にマ？真？
間？馬？さん？？いねえって・・・）

「＜ポ＞と呼んで下さい。私の村ではそうしてましたし店の従業員はそうしてましたですねんわ。」

「ポ？・・・ぽ？ポ店長？ヒデキってのが名前の部分では？なんなら
ヒデキ店長ってのはどうですか？ポってねえ・・・なんだか卑猥・・・
（何言ってるんだ私）

「いいえ、＜ポ＞ですねん。カホンタスマルガリロドリゲスヒデキ
が名前デスねんわ。」

「・・・と、とにかくポカホンタスマルガリロドリゲスヒデキ店
長 店に入りませんか？」

「おー！貴方はすごいですやんか！私の名前を一度で覚えた。感激
しますねんわですよ！！」

嫁に来ますか！ 私の第13番目 募集中ですねん！」

「・・・」(店の女に手を出す気か・・・いや・・・そこじゃねえ・・・やばい頭が・・・)

「遠慮しておきます」

「遠慮いりませーん」この国の人は遠慮が美德のように思ってるんですね」

是非来てクダサイ」

「行くかいねんわ!!」

・・・

言葉使いと頭が・・・侵されている・・・予感。

「あの・・・ポ店長。荷物お持ちしましょうか？」

「お〜〜アリガタイですね〜入り口にあるアレもお願いしますね」

「はい、承知しました・・・た？」駐車場入口を見た私は目を疑った。

スーツケースが5個、それに大きな・・・大きな樹が大量にあった。引越し業者の車が走り去るのも・・・見えた。

「ポ店長？あの大きな樹は・・・なんでしょう？」

「あれはコーヒーの樹です。玄関に植え替えます」

「ここに？ですか？植え替える必要・・・ありますか？ここは日本ですけれど・・・」

「あなた、コーヒーはミルク入れますか？」

「・・・あ、私はブラックですが」

「へー」。ポ店長は笑顔で階段を昇ってゆく

『ん？話終わった？ミルク入れてたらどうなの？え？ポ店長はミルク入れる派なの？入れない派なの？

・・・気になるじゃんか！！・・・』

なんの話をしていたんだろう

「ポ店長！」私はコミュニケーションを取るために歴代店長にはまず質問を試してみる。例えば・・・

「ポ店長？兄弟はいます？やっぱり名前とか・・・長いんですか？」

笑顔で答えるポ店長

「ハイ、私の兄はですねカホンタスマルガリロドリゲスゴロウ
すぐ下の弟はカホンタスマルガリロドリゲスヒロミです」

「へーなんだか昔のアイドル御三家じゃないですかー楽しいですね！

・・・てか・・・やっぱりカホンタスマルガリロドリゲス迄が名字じゃないんですか？」

「チガイますねんですよ。妹はポ・ミです。姉はポ・チですねん」

「短くね？男は長くて女は短いだなんて・・・」

「あなたエロデスねー」

「は？・・・や、やだ。名前が違い過ぎますって話ですねんわ。」

（完璧移った・・・）

「ところであなたの名前は？」

「私は河原崎 麗です」

「では＜カ＞ですね。カさん 今日からよろしゅうおたのもうします」

「あの、私の名字は略す必要がありますか？」

「カさん！ワタシ 喉が渴いたデスからして、後でコーヒーを貰えますか？」

「ポ店長！！ミルク入れる派ですか？それとも～～～入れない派ですか！！！！」（さぁ来い！どっちだ！）

「あなた、エロですね～～～愉快な人だ全～～～はははっは～～」

「なんで？」

その3「虎と龍と水と油とポ店长」

「あー家に、帰りたい。」過去にはない目の前の出来事の数々に私は頭がグルグルしていた。

ポカホンタスマルガリロドリゲスヒデキ店長の後を着いて行く私は侵されかけた脳を整理した

『何かの間違いだ。まさかこんな人が店长だなんてありえない。うちの店は売上だってそこそこあるし改革の必要性もない。』

そうよ、この上半身裸に藁みたいなの、スカート、しかも後ろ姿はケツが、出ている。

変質者に違いないのだ。この荷物の中身はきっとコスプレの服だらけで後はきつと店を襲撃する武器だったり爆竹だったり鉄パイプだったりするんだ。

絶対にヤダー！

本社の松下マネージャーに確認しよう。

松下マネージャー、まつ、した、

<マ>、さん。

ありえる。、、
』

ゆかりが店の入り口にいた。
特攻服に身を包んで腕を組み仁王立ちをしている

「あんた何してんの？ しかもなんでその服なの？ なんでもまだ持ってるの？」

「いつも持ち歩いています！」

急な雨に降られた時や？ 制服を忘れた時？ 或いは今日みたいな変質者が現れた時の為に！ アハ！」

「雨、ん時は まあまあ・・・わ、わからなくも、ない。

制服？、ありえないよ。

第一に、変質者が現れる事は滅多とない！！ しかもすぐに変身出来るライダーベルトでも持ち合わせてるのか？ おう？ ゴルア！」
私は怒りが込み上げると、＜港町レディース総長麗さま＞が出てしまう。

「、はい。

すみません。明日から中に着ておきます。」

「中に・・・蒸れるから、止めな。アセモ出来るし。」

今日で私は妄想の中でゆかりを3045回、殺した。冷静さを取り戻し

「ポカホンタスマルガリロドリゲスヒデキ店長 紹介、します。

神田ゆかりさんです
後のメンバーは間もなく出勤します。」

「おー!!!!!! 素晴らしい！お伽話に出てくる衣装のようだ。
」ポ店長は目をキラキラさせ言った

『嘘だろ。』

「この美しい刺繍は日本の文化ですよね！」 『虎と龍・・確
かに』

「さっすがパンチくん！分かる？」 調子こいたゆかりが言う

「ゆ、ゆかり 店長になんて事を・・」私はゆかりを小突きながら
小声で言った

「店長 頭気合い入ってますよね！あ・た・ま！どこであてたの？
」

ゆかりはポ店長の髪をいじる 『3046回目がまもなく来る』

「ゆ、ゆかり、止めなさいよ。
パーマな訳ないじゃん。南米奥地から来られたんだよ。分かるでし
よ？」

「ナカナカイケてるですよ？」

大衆理容のヤマモトってところであてたんですね。」

『うそ？』

「ワタシの村のものはだいたいが直毛ですからして、日本で流行っている髪型にしてくださいませねって言ったのですからして。

丁度店にモデルさんの写真があつたですよ。」

「流行ってる？」きつと聞き間違い・・・しかも直毛？イコールⅡボブか？おかっぱか？まる子か花子さんか・・・

「麗さん 駅前の店っすよ！あそこの親父もおんなじ頭してますって！笑える・・・超受けるう！！」

ゆかりが腹を抱えて笑う

調子に乗ったポ店長が

「ヘイヘイヘイほう・・・ トントんとん・・・」

「北島、　なの？サブちゃんなの？」モデルの写真が・・・サブちゃん。さすがパーラーヤマモト。

「まっいいや

それよりポ店長 服着ませんか？」

「クールビズです。」

「いやいやいやクール過ぎますって。しかも右腕のタトゥー、が気になるんですね。日本では、」

ゆかりが ポ店長の腕をいじる。

「かわいいっ！どこで売ってたの？本物は痛いしっ！」

「ゆかり、あのね考えてみて？シールな訳ねえだろ

奥地から来てるんだって。

あーカルチャーショックの嵐。あたま痛え。」再び小声で話す

店長は鞆をおもむろに開けた

「あげます！ ウエハースチョコに付いてたんデスカラして。びっくりなんとか？ なんとか？ ってやつにネ！ どうぞ！ どうぞ！」

店長は私にもくれた くびっくりもっこりチョコ＞だった

ポ店長の腕の柄と同じ虎と龍の・・・タトゥーシールを。

もう一度頭を整理する必要あるな

『この男は・・・何者だ』

心の声がいつしか声になっていた。

ポ店長が言う

「私は足長族の者です」

「マジっすか！ポ店長も走ってたんですねっ仲間じゃないですかっねっ麗さん！」

「仲間ですか？嬉しい響きですネンわっ獲物を見つけたら走りますねんっ」

『お願いゆかり・・・これ以上 この店長をいじらないでくれ・・・頼む・・・』

「ねっアホポントスマルガリータ店長！なんの動物を追っかけてたんすか？？」

「ナンダカンダさんっ」 『どっちもどっちだ・・・』

「アナコンダですねんよ！！」

「あなこんだ？やだっ私はか・ん・だでっす」

「アハハは～～愉快な人だっ」

「・・・3046・3047・3048」

頭の中で・・・
パパラパラパラパア

ゴッドファーザーが鳴っていた。

その4「本日休業！」

「ゆかり！集会するよ！みんな呼んで来な！」

『あゝゝゝゝイライラしてきた。』

「はあゝい」 相変わらず脳天気なゆかりがみんなを呼びに行く

「皆さん朝礼しますゝってえゝ」

「朝礼を始めます。

まず、最初に・・今日からこの店に配属になりました

くポカホンタスマルガリロドリゲスヒデキ店長＞です」

ザワザワとしている
そりゃそうだ。

「皆さん初めまして！ たった今、撃たれました ・・ポです！」

『撃ってねえし。』

「店長？冗談は止めてくださいねゝ」笑顔で切り返す私。

「たった今 放たれました？・・であってますか？」

『放つ？何を？矢をか？私がかっ？ おう？ゴルフ、ゝ』

「い、いえ・・・あの店がまもなく・・・」

「みなさん！今日はとっても大切な日です！！私と皆さんが初めて会った日デスカラして、コミュニケーションが大切ではなからうかと私は言いたいねんわ」

それなんです！私はこの店を任せました。私の思うようにしていればガッポガッポ儲かりまっせ～～～ですので今日のこの良き日！！お店は休みにします！！自己紹介をして今からパーティをしますですねんよ」

「は？・・・冗談・・・ですよ？」
呆れてキッチンのメンバーはスタンバイに戻ろうとする。キッチンのチーフは険しい顔で言う

「ポ店長。ここは日本です。前の店のやり方とは変えてもらわなければいけません。
毎日の予算があるのはご存知ですよ？今日発注した食材・・・いったいどうするつもりですか？
朝礼に冗談は止めていただきたい。」

「あなたはなんて名前です？」

「私はキッチンのチーフの松本宏です。」

「お～～マツモトキヨシ村出身ですね～～～！」

「・・・いえ違います・・・」

「ではくまさん」

今からパーティの準備をします！食材はパーティで食べましょう」

「・・・・・・・・」

夜の学校並みの静けさが漂った。心なしか生暖かい風が吹いている気がした。

私はチーフの元へ歩み寄った「チーフ。お気持ちは察します。・・・とにかく今日のところはポ店長の言うとおりにしましょう。後で私が絞めておきます」

「絞める？」

「い、いや、事務所の戸を閉めてから、本社に電話してマネージャの指示を仰ぎます。」

「頼んだよ・・・」

「お電話ありがとうございますう~~~~くみんなの笑顔がみたい！あなたのホっとする顔がみたい！和洋折衷なんでもあるよ！のファミリーレストラン　どくろです！>・・・の本社宮下でございます」

私の大嫌いな女・・・宮下だった。

「あー宮下さん。」

「なんだ、河原鉄子かよ」

「だから昔の名前は封印したんだって。その名前と呼んだらてめえもバラすぞ。隣の横須賀女族の元総長って事をな。ほんと！うぜ

え！ お前。かわいい声だしやがって。
酒と煙草で焼けたガラガラ声の癖してよ。1オクターブ高いっての。
ウケるよ。

しかもいい加減長い前置きと店名を自動音声で流したらどうよ？」

「何言ってるのさ、私の声が聞きたいって声がある以上、
毎日でも言うわよ。ただ、ファミリーレストランにしては合わない
店名だけどね。アハハ」

「ほんとだよ。まあ社長も＜元＞って噂もあるけどね」
そんなことより＜マ＞さんいる？」

「は？ 誰？＜マ＞さんって？」

「あーやばい。侵されてる。いや、松下マネージャーいる？」

「ちよっと待ってて。」

松下マネージャー~~~~~電話ですう」

『・・・死ね。』

「あ、お疲れさまです。河原崎です。あの新店長の事で・・・ご相談
があります。」

「あーポカさんね。まあね、いろいろあると思うよ。最初だけだし
さ、そのうち慣れるしさ。海外でも成功してるし大丈夫です！」

「あの・・・今日は店を閉めるって言うっておられますが・・・」

「店を閉める？ ですか・・・は」また斬新なアイデアだなく。OK
です。許可します。」

『するんかい！』「わかりました。では失礼します・・・」私は項

垂れながら受話器を置く・・

電話を切った私の後ろから、ポンポンと私の肩を叩く人がいた

「オデンワですか？ ワンギリとか？ 本社にですか？ アハハ」
「非通知電話です。」

くもう普通に受け答えをする気にならない
＞
心で私は叫んでみる。

その5「従業員の呼び方を変えます！」

「非通知デンワって楽しそうですねっ！どうやってシマスカ？」

「電話機の設定を変えれば良いだけですよ。」

「楽しいのは良い事デスからして、店の方の電話もそうしますか？」

「しません。」 「カさん。私気付いた事ありますネンワ。あなた様は更年期ですね？なにか分からない事にイライラしたりするって、ネットで読みました。」

『だ、だれか私を・・・助けてください！！！！！！世界
の果てまで行ってこいポカホンタス。』

「店長、私も気付いた事を述べても宜しいでしょうか。私が＜カ＞なら神田ゆかりさんも＜カ＞ですよね。」

川島さんも＜カ＞なら寛さんもですよ？私達は一斉に返事しますよ？もしくは分からないので振り向きもしませんが、いいんですか？」

私は呆れと怒りで意地悪に言ってみた。

「ダイジョーブです！！心配症ですね〜」そう言って店長は事務所に走り5つあるうちの一つのスツケースを私の目の前に持ってきた。

そしてパカッと開け取り出した

「パパパッパパ〜バンブーちゃん〜」猫型ロボットのポケットから取り出した設定みたいだった。

「これはデスね、楽器ですからして音が出ますネンワ。私の村とマツモトキヨジ村しか使われていません」

「ポロポロ族のマシダさんは使用されてないのですか？」

「アハ、ポロポロ族のマシダさんは声が楽器ですからして必要ないですから、あの人はのど自慢大会で

バンブー15本取った人ですからして、すごいでしょ？」

「バンブー何本が最高なのか分かりませんし、なんとも言えません」

「ほんとすごいよ。マシダさん。今頃何本取ってるですかね」遠くを見つめるポ店长。

「今頃って？毎日開催されてるみたいな感じですか？」

「さて・・・と」

『、また話変わった。』

「河原崎さんの＜カ＞はこれ。川島さんの＜カ＞はこう、そして箕さんの＜カ＞はここ。

覚えましたか？」

「・・・・・・もう一度お願いします。

無理です。一人では。みんな呼んで来ていいですか？」

「どうぞどうぞ」

店長はバンブーで出来た木琴のような楽器を鳴らす。

私の＜カ＞はドレミの＜ド＞の音。川島さんは＜ミ＞ 寛さんに至ってはなぜか和音＜ドミソ＞を弾いた。

店長は続けて言った。

「私が店の中であなた方を呼ぶ時、この音を覚えててくださいよ！」急にスパルタになった。

「はい！この音は？」バンブーを鳴らす店長。

「ミ、ミ？ミだよね？」「た、たぶん＜ミ＞だ、だから川島さん？」

「セイカーイーですねん！！！」

「これは？」「ド・・・です。なので河原崎・・・です」
ジャーン。和音はさすがに分かった。

「では店長、この音で名前の違いを示すのですか？」

「そーです。河原崎さん、川島さん、寛さん。よろしく。それから特別サービスですよ。日本の人向けに分かりやすい聞き分けかたも伝授します」

「良かった~~~~ホっとするよね~~~~教えてください~~~~」私達は口を揃えた。

「音を覚えたら後は簡単ですからして。」

河原崎さんは＜カッ！＞川島さんは＜カー＞ 寛さんは＜ン＞ かつ＞です」

「私は＜カッ！＞ですね。小さい＜つ＞が入る感じ。川島さんは伸びる感じ。」

「じゃ、私は？」 寛さんが言った

「んっつか！＜か＞の前にめっちゃ溜める感じが入ったら笥さん
だわ。溜めなければ私ね。」

＜カッ＞ね＜カッ＞」私は自分でも練習した

「ねっっっなんか楽しそうっっっ」

ゆかりがやってきた。

「神田さん……も＜カ＞でした。店長。」

「そうでしたねっっっっでは神田さんはこの音」
なんだかシャープっぽい音だった。半音上がる・

「呼び方は？」私が尋ねた

そしてポ店長は笑顔で言った。＜カッツ＞」

「それは私の＜カッ＞ですよね？」

「ちがまっすっ音もよく覚えてくださーい。言葉ではですね、こ
う＜ツツ、ツツ＞です」

舌打ちするようないや、舌を噛みそうなくカッツ＞がゆかりの呼
び方だった。なるほど。

「河原崎さん、神田さん、川島さん、笥さん 明日からよろしくデ
スねっっ」

『心なしか……私は楽しさを覚えていた。……早く呼んでほしい。
その呼び方で。そうも思っていた。』

ゆかりが言った。

「ポ店長って頭いいっすよね！ 私達の名字をすぐに覚えてたよ！ あったまいくくく」

私は我に返った。

変える必要性・・・あんのか？

「そうそうくさつき面接の電話が入りました店長」

「ありがとうナンドカンドさん」

「へ？・・・カッツ、カッツでいいですよくくく。面接の方は明日の10時に来られまーす。
名前は笠井さんです」

店長はニコッと笑って私を見た。そして一旦、直した楽器をまた、パツカッと開けたのだった。

たぶん今度はフラット・・・半音下がるパターンに違いない。そして『カアアアアアアッ！』って感じだな。うんうん。

どーでもいい。。。

その6「制服を変えます」

この1週間・いろいろなあった。

まず、面接の＜笠井＞さんが落ちた事。理由は呼び方とバンブーちやんの音に納得が行かなかった

・・・とポ店長の独断と偏見であった。・・・ご愁傷さま・・・か・・・

そして、＜コミュニケーションだよ全員集合！！＞的なパーティに会費を10000円、強制で給料天引きになった事。

その日の一日の予算クリアの為だ。・・・誰の為だ・・・誰のせいだ・・・
。おう？ゴルゴル・・・ア。

そして店の外にコーヒーの木が植えられ・・・店内の雰囲気アマゾンチックになってしまった事。

まあ、なんとか我慢してきた。

が、しかし・・・本日より、とうとう制服までもが変わってしまう。

「店長、この・・・この裸に近い制服、なんとかありませんか？藁葺きのスカートに・・・貝。貝・・・フラダンスみたいな感じ・・・は必要でしょうか・・・しかもこの貝殻？胸当ての部分の貝はどう見てもホームメイド感が満載なんですが・・・あさり？みたいな・・・ですか？しかもムール貝もあれば牡蠣ガラ？そしてこの＜しじみ＞はありえませんか・・・

なぜホタテじゃなかったんですか？い、いや、か、貝はないですって！！」

「＜カ＞さん私の村ではホタテなんです。日本ではアサリのほうが安いですねんわ。藁もわざわざ飛驒の方から取り寄せたですねんからして・・・」

屋根のか？まさか？

「とにかくにもチャンチャカちゃーん制服はこれで行きますねんよーはいー」

そして私もちゃんと制服ありますねんよ。ジャパンのものなんですよがね」

ポ店長だけジャパンの制服だよ。

「パパパッパパー~~~~~」出た。猫型ロボット風前フリ。

「素敵なネクタイじゃないで・・・す・・・か？」・・・短い。

店長が鞆から出したネクタイは丈が異様に短かった。いっそのこと蝶ネクタイにすれば~~~~~的な？鎖骨から指一本出たくらいの短いネクタイだったのだ。

「で、で、店長。カッターは白でブレザーは紺ですよ？普通ですよ？」私は焦りつつ聞いた。

「カッター？ブラジャー？NO！NO！そんなのは着ませんですねん。」

店長は私の目の前でネクタイをつけた。

乳首が黒い・・・

いや乳首が見えていた。そう店長は藁葺きスカート、しかも後ろはないです、ケツ見せファッション上半身裸に直接ネクタイですか

？>的な制服姿になった。

「変態ですかね？」ゆかりが呟いた・・・ではなく

直接ポ店長に言っていた。「変態ですか？超～～ウケるんですけど
～～」

・・・ウケないが。

「麗さん～～私は蛤とっぴ！早い者勝ちですよ～～」

「え？そうなの？ムール貝・・・は貧乳に見えそうだし・・・牡蠣に至っては・・・なんか中身が黒そうなイメージつくし・・・しじみ・・・はないわ。」

あさり・・・でいいか。」

「川村さんと笥さんはどうするの？早い者勝ちらしい。」

「私達は先に決めちゃいました～～」

「うそ？え～～～～なんでホタテがあんのよ～～～そっちの方が
アフロディーテっぽくって絶対かわいい～～」ゆかりが叫んだ。

「おまいら、人間じゃねえ・・・私なんてアサリなんだ。小ささと言
い。。柄といい・・・最悪じゃん。私の清らかなピンク色の部分が見
えたらどうしてくれるんだ・・・」私は泣きそうになっていた。

「パパパッパパー～～～～みなさ～～～ん人類皆兄弟！！仲良
くしましょう。」ポ店長はそう言うと言からホタテをジャラジャラ
鳴らしながら胸当ての部分の部分をたくさん出してきたのだ。

「店長！それは？もしかやホタテですね！高いのでなかったんじゃ・・・」

「昨日、築地に行って買ってきてたんですからしてネ〜〜」

「ポ店長。ありがとうございます」

私はポ店長の奥に秘めた優しさに感激をした。これでアサリじゃないかな。

何が早い者勝ちなんだ〜〜ゆかりめ〜〜

私はホタテを手に取り、更衣室に即行走った。鏡に向かって胸に＜帆立＞をつけた。

・・・

我に返る。

「こんな格好で店に出るのか？・・・ホタテ・・・貝は・・・貝じゃん？嫌じゃん私？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8001v/>

店長が変わりましたっ！

2011年10月9日00時06分発行